

第 63 回日本チベット学会大会研究発表要旨

1. ダライ・ラマ政権成立前夜におけるゲルク派のアムド布教—ゲルク派僧侶デパ・チュージェの活動を中心にみた— (伴真一朗)
2. 現代チベットにおける聖地表象と移動による信仰圏形成—一年の聖山巡礼を事例に (別所裕介)
3. アムドのボン教高僧ウォンジャ=ヨンドン・プンツォク (Bon brgya g.Yung drung phuntshogs, 1874-1934) の事績について：その自伝を中心に (三宅伸一郎)
4. アムドにおける砂曼荼羅制作の現状—ラジャ寺とシャキュン寺を中心に— (田中公明)
5. タントン・ギャルポの修学事情に関する一考察 (信賀加奈子)
6. ゴクチェンにおける三智 (ye shes gsum) の理論—ロンチェンパの解釈とその典拠に関する考察— (デロッシュ マルク・ヘンリ、安田章紀)
7. ウランバートル写本カンギユル所収の『阿闍世王経』について—テンパンマ系諸写本との関係を中心として— (宮崎展昌)
8. チャパ・チューキセンゲの中観思想 (西沢史仁)
9. Stein 敦煌蔵文仏典 No. 26 (原田覺)

ダライ・ラマ政権成立前夜におけるゲルク派のアムド布教 —ゲルク派僧侶デパ・チュージェの活動を中心にみた—

伴 真一朗 (元大谷大学真宗総合研究所嘱託研究員)

15 世紀前半にツォンカパによって創始されたゲルク派は、17 世紀からアムドへの布教を積極的に行った。近年において池尻陽子氏や Gray Tuttle 氏が明らかにしているように、アムドにおけるゲルク派の高僧や寺院は同派がモンゴルや清朝に進出する上で、また中央チベットのダライ・ラマ政権がアムドに影響力を及ぼす上で大きな役割を果たした。しかし 17 世紀の前半期即ちダライ・ラマ政権が成立する直前のゲルク派のアムド布教についてはその概略しか明らかにされていない。その理由はこの時期のアムドの歴史についての従来の研究は『テプテルギャムツォ』等の後世に成立した史料に依拠しているためと考えられる。

さて、近年においてアムドの高僧であるカルデンギャムツォ (skal ldan rgya tsho, 1607-1677) の全集が公刊された。著者の生没年からこの全集は 17 世紀のアムド史に関する同時代史料といえる。その中に収録されている中央チベットからアムドに派遣されたゲルク派僧侶デパ・チョージェ (sde pa cho rje, 1593-1638) の伝記『デパ・チョージェ伝 (sde ba chos kyi rje bstan 'dzin blo bzang rgya mstho dpal bzang bo'i rnam par thar pa dad pa'i sgo 'byed) 』 (1644 年

成立)には、同派のアムド布教の実態が詳細に述べられている。しかし従来の研究では本史料の内容が検討されることはなかった。

本発表では同書にあるデパ・チョージェがモンゴル人、アムド・チベット人、明朝官僚に布教した記述を検討することにより、モンゴルと明朝の抗争で複雑な情勢にあったアムドにおいて、ゲルク派が諸勢力の支持を得て自派の優位を確立していった過程を明らかにしたい。

現代チベットにおける聖地表象と移動による信仰圏形成 — 午年の聖山巡礼を事例に

別所裕介 (広島大学)

本発表は、「巡礼」という宗教実践を題材として、中国領有下の現代チベットに再生する民衆的な宗教表象空間の構成とその存立構造を、量的統計と質的調査の両面から明らかにすることで、従来ひとつの聖地内部で完結しがちだったチベットの巡礼研究を、より開かれた社会的文脈の下で捉え直そうとするものである。

発表者は、アムド地方の著名な巡礼地であるアニ・マチェン (日本名: アムネマチン) が 2014 年に「干支年巡礼」(gnas 'dus, 特定の干支の年に定まった聖地をめぐることで通常に倍する功德が得られるとする風習。アニ・マチェンの干支は午年であるとされる) を迎えることをふまえ、聖山への登山口に定点観測地を設けて巡礼者の空間的移動の広がり調査した。他方で、徒歩で実際の巡礼ルートを踏査し、ルート上に展開する各種霊跡の現況とそこで行われる儀礼行為の参与観察を進めた。

本発表では、この現地調査の結果として、市場経済システムの浸透に並走する運動としての聖地巡礼を捕捉する上で、以下の2つの論点を提起したい。

①インフラ開発の影響: 西部大開発以降のインフラ開発の進展により、現在のアニ・マチェン山域には物流と観光の大動脈となる道路が敷設されつつあり、これに伴って聖地には巡礼目的以外の多様な他者の流入が目立っている。発表では、こうした近代的な変動要因を含みこみつつ現場で実践される宗教的表象行為の持続性に焦点を当てる。

②信仰圏の広域化: 本聖山はもともと部族の守護をつかさどる土着神を祀る場であるが、今日の複製技術や情報メディアの拡散、モータリゼーションによる移動の便宜化、近年の民族意識の高揚などの要因により、従来の信仰圏のあり方に基層からの変化が引き起こされている。

以上の2つの観察結果に基づき、本発表では、これまでの同山に対する干支年巡礼(1990年、2002年)のデータと比較しつつ、近代国家の周縁部に再形成される現代的な民衆宗教の特徴を描き出したい。

アムドのボン教高僧ウォンジャ＝ヨンドン・プンツォクの事績について —その自伝を中心に—

三宅伸一郎（大谷大学）

ウォンジャ＝ヨンドン・プンツォク（Bon brgya g.Yung drung phun tshogs, 1874–1934）は、ツェウー寺（rTse dbus dgon pa、甘肅省甘南州にあるボン教寺院）の座主で、「法主（chos rje）」の称号を与えられたジャルワ・ツルティム（rTse dbus chos rje rGyal ba tshul khirims, 1795–1874）の「心」の化身とされ、現在レプコン地方のボン教徒の指導者であるウォンジャ＝ゲラク・ルンドゥブ・ジャムツォ（Bon brgya dGe legs lhun grub rgya mtsho）師の先代の化身であり、同師が座主を務めているウォンジャ寺（Bon brgya sman ri bshad sgrub smin grol gling）の基礎を築いたとされる人物である。その事績を知る上で最も重要な史料は、彼が60歳の時に著した自伝『密教僧ヨンドン・プンツォク・キードゥブ・ジクメが毎年白き善行をおこなったありさま・随者行解脱道階梯（sNgags btsun g.yung drung phun tshogs mkhas grub 'jigs med kyis lo re bzhin rnam dkar dge ba bsgrubs tshul gyi lo rgyus rjes 'jug thar lam bgrod pa'i them skas）』（木版本、192葉）である。今回の発表では、未だ学界に十分に知られていないこの自伝の内容を紹介しながら、彼の事績のうち

- (1) 宗派の区別にとらわれない、さまざまな学者・行者との交流
- (2) ボン教木版本開版事業

の2点に着目し、そのチベット宗教史上における位置付けをこころみる。

アムドにおける砂曼茶羅制作の現状 —ラジャ寺とシャキュン寺を中心に—

田中公明（中村元東方研究所専任研究員）

発表者は、2014年4月29日から5月10日まで、青海省ゴロク（果洛）チベット族自治州のラジャRwa rgya（拉加）寺を訪れ、同寺で行われた大曼茶羅祭 dkyil 'khor sgrub mchod chen mo を調査し、写真と動画撮影、文献の蒐集を行った。ラジャには現在も17種類の砂曼茶羅のレパートリーがあり、毎年冬と春の2回に分け、五つの学堂が分担して制作している。これほど多数の砂曼茶羅のレパートリーは、中央チベットの大僧院にも例がなく、貴重な無形文化財といえる。しかもこの中には、日本の両界曼茶羅を構成する胎蔵曼茶羅と金剛界曼茶羅が含まれている。しかし2014年の調査では、現地到着が遅れたため、曼茶羅の度量法を研究するために重要な「墨打ち」 thig gdab pa の模様を見ることができなかった。そこで2015年4月16日から23日まで再びラジャ寺を訪れ、前回見ることができなかった墨

打ちの儀礼を調査するとともに、いくつかの補足調査を行うことができた。さらに 4 月 22 日には、ツォンカパゆかりのシャキュン Bya khyung (夏瓊) 寺を訪ね、同寺の三つの学堂に伝えられる砂曼荼羅の種類と、制作日程についても調査することができた。本発表では、アムドのチベット仏教寺院に伝えられる砂曼荼羅制作儀礼と、その学術的価値と、それを研究する意義について紹介することにしたい。

タントン・ギャルポの修学事情に関する一考察

信賀加奈子 (国際仏教学大学院大学)

タントン・ギャルポ (Thang stong rgyal po, fl ca 14-15c) の事績は、ギユメ・デチェン ('Gyur med bde chan, 1540-1615) による彼の伝記が、2007 年に C. Stearns 博士により英訳出版されたことにより、一層広く知られるところになった。本発表では、こうした諸々の業績に敬意を表しつつ、特にタントン・ギャルポの修学事情について、彼の直弟子の一人シェーラブ・ペルデン (Shes rab dpal ldan) が著した伝記『稀有大海 (Ngo mtshar rgya mtsho)』に基づく一考察をこころみたい。

数ある異名に「チメー・リクズィン ('Chi med rig 'dzin)」とも呼称され、一説に 125 年ともいわれるその長命な生涯において、シャンパ・カギュ派/ニンマ北伝派といった師資相承に連なるタントン・ギャルポは、インド、ネパール、そしてチベットの諸宗派より五百人もの師から学んだとされ、これが彼のチャクサム派 (lCags zam lugs) が超宗派 (Ris med) の中で発展したといわれる事由である。

「鉄鎖橋の成就者 (grub chen lcags)」とも呼称されるタントン・ギャルポは、自ら「菩薩道としての鉄鎖橋 (byang chub kyi rgyu)」と表現した鉄鎖橋をチベット及びブータンに数多く架けたことで知られ、この事績は彼が数多くの師に学んだ修学内容、及び発掘した修法に由来するものと考えられるが、根拠となり得る直接的な線 (through line) を引くことは難しい。本発表がチャクサム派に流れるタントン・ギャルポの修学事情について、一つの研究の視座に資する考察となるようつとめたい。

ゾクチェンにおける三智 (ye shes gsum) の理論 —ロンチェンパの解釈とその典拠に関する考察—

デロッシュ マルク＝ヘンリ (京都大学大学院総合生存学館(思修館))

安田 章紀 (京都大学こころの未来研究センター研究員)

インド・チベットの仏教史において、「ゾクチェン」(rDzogs chen)、つまり「大いなる完

成」は、チベット仏教ニンマ派およびボン教において、至高の乗とみなされる独特の統合的体系を形作っている。ゾクチェンについては、中国禅との類似性がいくつか従来指摘されてきたが、それらの類似性は、3部からなるゾクチェンのうちでも、いわゆる「心部」(Sems sde) のみに限られ、「界部」(Klong sde) や、最高峰とされる3番目の「教誡部」(Man ngag sde) には当てはまらない。本発表の目的は、「原初の根基」(gdod ma'i gzhi) と呼ばれる概念に関する教誡部の見解を、「三智」(ye shes gsum ldan)、すなわち「空なる本体」(ngo bo stong pa)、「明らかな本性」(rang bzhin gsal ba)、「障害なき慈悲」(thugs rje ma 'gags pa) という特徴付けに沿って、明らかにすることである。

発表者はこの理論を、ロンチェン・ラブジャムパ (Klong chen rab 'byams pa, 1308-1364) の著作集とその典拠となった文献群、とりわけ教誡部の「17 タントラ」に依って紹介し、三智の理論が、基・道・果の観点から、教誡部の構造的指標と見なし得ることを示したい。三智は、仏陀の三身の潜在性を表現すると同時に、「空」(stong pa) と「輝き」(gsal ba)、「界」(dbyings) と「明知」(rig) が「もともと不可分なこと」(gdod nas dbyer med) をも提示している。三智の理論はこのように、下位の諸乗から用語を借用しながらも、実際のところ、本来より上位の概念を表現しており、ロンチェンパから無偏運動 (ris med) の諸師に至るまで、仏教全体を把握する上で、解釈学の中心的な鍵となったのである。

ウランバートル写本カンギュル所収の『阿闍世王経』について —テンパンマ系諸写本との関係を中心として—

宮崎 展昌 (東京大学特任研究員)

ウランバートル・モンゴル国立図書館所蔵のギャンツェ・テンパンマ・カンギュル写本 (=通称「ウランバートル写本」, 以下「ウ写本」) は、2010年にデジタル媒体の形で公表され、この貴重な写本カンギュルを直接調査することが比較的容易になった。本発表では初期大乘経典のひとつである『阿闍世王経』(以下『阿闍世』) を取り上げ、ウ写本と他のテンパンマ系写本カンギュルとの関係や同経ウ写本にみられる特徴について検討する。まず、『阿闍世』に関しては、ウ写本とともに、ロンドン、東京、トクパレスの4種の写本カンギュルのあいだで長大な異読2点が共有されることを確認し、上記4種がいわゆる「テンパンマ系」として分類できることを示す。次に、カンギュル諸本のうち、ウ写本、東京写本、トクパレス写本の3種では『阿闍世』は4 bam-po 構成であるのに対して、他本、すなわちロンドン写本、ならびにツェルパ系諸本で bam-po 構成をとっている場合は5 bam-po 構成であることを指摘する。そして、同経については5 bam-po 構成のほうが本来的で、4 bam-po 構成のものはいわゆる「過誤」によると見られることを提示する。3点目として、『阿闍世』のウ写本とロンドン写本の2本でのみ共有される異読が多数確認されることを指摘する。また、『阿闍世』ウ写本のなかで、他本で第5 bam-po に相当する部分には後世の手による

修正の痕跡が複数みられることを確認する。最後に、上記諸点を総合的に勘案して、『阿闍世』のテンパンマ系カンギル写本4種についての系統図を提示することを試みる。

チャパ・チューキセンゲの中観思想

西沢 史仁（大谷大学真宗総合研究所特別研究員）

チャパ・チューキセンゲ (Phya pa chos kyi seng ge, 1109-1169) は、チベット初期仏教教学の形成に多大な寄与を為したサンブ系学者である。発表者は、以前、チャパの主著の一つである『論理学意闡括拭』(*Tshad ma yid kyi mun sel*) を資料として、チャパの思想的立場を分析し、それを「外部対象を認める無形象論者にして、離一多性による空性論証を認める中観派」と規定した(西沢 2012)。さらに、チャパの中観思想については、彼の教義書や中観綱要書『中観東方三論提要』(*dBu ma shar gsum gyi stong thun*) を資料として簡単な考察を加え、チャパの中観派の分類を紹介した(西沢 2013)。

本発表においては、以上の研究を踏まえ、チャパの思想がチベットにおいて如何に解釈されてきたのかということ、グー翻訳師の『青冊』やシャーキャチョクデンの『論理学史』等を資料として紹介した上で、特にチャパの中観思想に焦点を当て、それが従来の伝統的な中観派の分類の枠に収まらない独自のものであることを明らかにしたい。加えて、後代におけるチャパの思想的影響の一端をも紹介する予定である。

西沢 2012: 『論理学意闡括拭』におけるチャパの思想的立場『印仏研』60-2 (2012), pp. 1062-1059.

西沢 2013: 「チャパ・チューキセンゲの教義書」『日本西藏学会々報』59 (2013), pp. 67-84.

Stein 敦煌蔵文仏典 No. 26

原田 覺 (国士舘大学)

表題に掲げた St. No. 26 に関しては、嘗て I. 滅諍法と II. 十八部の部派分裂で Vinītadeva の所説を含む仏典とであると、その後 I. は北京版 No. 5614 に対応文があることが明らかとなったけれど、近年の同仏典の影印出版では I. 戒律因縁と II. 異部宗輪論述記とであるとのみ表示している。筆者の調査によると、以下に述べる如く多数の既知の仏典と関連する一方で、全体として滅諍法の意義を明らかにする為に、論諍 *rtsod pa* を部派分裂の根拠として位置付ける仏典であることになる。同仏典は本来の葉数として *hdul1=6* (=所蔵葉数 2~7) を付しており *hdul1=2~5=6* は表裏各 6 行で *hdul6=7* のみ表 7 行、裏 8 行であり、明らかに末尾

葉の行数を増すことによって同仏典の全体を紙幅の内に収めようとしている。

拙稿で関説すべき同仏典と関連する諸仏典を要旨に代えて列記しておく、北京版 No. 5614 『聖説一切有部根本比丘尼波羅提木叉經註』；北京版 No. 5639、dByig gi bśes gñen 造、Dharmā ka ra、bZaṅ skyoṅ 訳『異部執輪論』；北京版 No. 5641、Dul baḥi lha 造『異宗義次第読誦輪中、異部説集』；北京版 No. 5832 『翻譯名義大集』；北京版 No.5851、dPal brtsegs ほか造『デンカルマ目録』；dkar chag ḥPhaṅ thaṅ ma; St. No. 700; 大正蔵 No. 2812 曇曠撰『大乘百法明門論開宗義決』；大正蔵 No. 1545 玄奘譯『阿毘達磨大毘婆沙論』；大正蔵 No. 2031 世友造、玄奘譯『異部執輪論』；大正蔵 No. 2032 眞諦譯『十八部論』；大正蔵 No. 468 僧伽婆羅譯『文殊師利問經』；大正蔵 No. 2033 天友造、眞諦譯『部執異論』等であり、吐蕃仏教史の諸問題の何等かを解決するには至らないけれど、幾つかの問題に関連する仏典であるので、資料紹介として同仏典を採り上げたい。